

# 「第二回ふるさと探訪と交流の集い」に参加して

東京板倉会 会長 清水忠志

新緑の鮮やかな五月二十四日、二十五日東京板倉会では、第二回ふるさと探訪と交流の集い『聖窟と丈の山・山寺薬師を散策山ボウシをたずねて』が行われた。

初日は午後一時、上越市板倉区久々野にある「やすらぎ荘」に集まった。メンバーは八名、地元では懐かしい方々、寺野歴史を考へる会「板倉まちづくり振興会」皆縁等総勢三十名長寿餅弁当を食べて丈の山へ向かう。

かねてより、板倉・寺野地区のみならず県内の「有志の方々による寺野歴史を語る会」が地域の歴史と文化の再発見に取組まれ、山寺薬師→丈の山→聖窟→地すべり資料館→やすらぎ荘など「散策道づくり」が行なわれていた。前回十五名の会員が植えた「山ボウシ」今年も「山桜」が用意されていた。

紙やスコップを思いおもいに散策道へ

〇年前の昔、白雉(はくち)年間(六五〇～六五四年)に僧阿果が修験道的な山岳仏教の先達として丈六山(たけのやま)を開創したと謂われ、以来行基、裸形、紀躬高等の名僧知識にまつわる古典伝承で三寺三千坊の名蹟としてうたわれてきた(山寺薬師奉詣会由来)。

続いて今回は、上越市教育委員会副課長中西聡氏による「日本の中の上越」親鸞はなぜ上越に流されたか、が講演のテーマとして生まれお話しされた。直江津にコンパスの芯をあて回してみると日本列島の中心になるという。そして食べ物、道具、地理と文化から話し出された。親鸞はなぜ上越に流されたのか。これは面白い。伯父さんにあたる日野宗業が越後国府権介(今でいう県知事)職としてこの地に居られたのである。お公家の親鸞が当時政治犯として流罪となつたが伯父さんの経済的庇護、配慮があつたと資料をもとに語られる。板倉(郷)山寺は文化発祥の地、山寺五山の一つ猿供養寺旧蔵の銅造如来座像が今、上越市金谷山医王寺に伝わっている(当時蔵の弘法大師御作薬師如来略縁起)によれば、本蔵はもと山寺猿供養寺にあり、金谷山曼荼羅寺の塔頭である当時に移されたものという」と記されており、飛鳥時代(推古天皇五九三～天明天皇七一〇年)後期七世紀後半作重要文化財と解説され思わ

ず聞き入った。眞田様、中西様方々からおじいさんおばあさんの昔はなしの世界から、今につながる意義ある歴史の流れへと私達の頭は開かれて、上越市は昔年ら一つの郷土であると感じる。その後やすらぎ荘へ行き温泉につかる。六時板倉まちづくり振興会、寺野歴史を語る会の皆様との交流会となつた。翌日光ヶ原高原へ、高原センターから、ミスパシヨウの森までハイキング、あちこちに残雪が見られ、ふきのとうが沢山でいた。標高八〇〇mは霧と新緑おいしい空気を満喫、高原を後とする。

地元の皆様の活躍、誠意に触れ、ふるさと探訪の旅では今回も大変お世話になり、会員一同関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

(市村喜幸 記)

植樹、ありがたいことに支えの竹と縄も用意してあり、名前付きの杭を根元に打つた。丈の山山頂には昨年植えた五本の山ボウシの木がすくすくと育っている。若葉は生きいきと黄色みをおび、下葉は緑、植えてもたつて大喜び、人が手を振るように風で葉っぱを揺らしている。その根元には名前前の入った杭が打たれていた。今年も山桜、足場のいい処に植えて行った。「存知の山桜は、山に生えているサクラの若葉が出るのと一緒に白い花が咲く、樹齢が長くいつまでも楽しめる、山そのものも守ってくれるという。全員揃つての記念撮影。

山を降りて地すべり資料館へ集まった。寺野歴史を語る会ではおなじみの眞田弘信氏による猿供養寺物語、乙法寺物語、山岳仏教遺跡を題材とする講演会に聞き入った。「存知山寺薬師は遠く一、三〇

山を降りて地すべり資料館へ集まった。寺野歴史を語る会ではおなじみの眞田弘信氏による猿供養寺物語、乙法寺物語、山岳仏教遺跡を題材とする講演会に聞き入った。「存知山寺薬師は遠く一、三〇

山を降りて地すべり資料館へ集まった。寺野歴史を語る会ではおなじみの眞田弘信氏による猿供養寺物語、乙法寺物語、山岳仏教遺跡を題材とする講演会に聞き入った。「存知山寺薬師は遠く一、三〇



丈の山山頂にて記念撮影 2008. 5. 24